2010.09.30
vol.15

赤谷の森だより

Akaya no moridayori

AKAYA PROJECT
赤谷プロジェクト地域協議会
㈶日本自然保護協会
赤谷森林環境保全ふれあいセンター

特集 赤谷の森写真館 ②③

センサーカメラとテンモニ隊の活躍……4-6
赤谷プロジェクト活動日誌 ……7
赤谷プロジェクトに望むこと・新メンバーの紹介…8

8月8日の『ムタコの日』よ！みんな来てくれてありがとう。

俺たちもますます、すみやすくなったよ。次回は、10月17日だよ！

次回「ムタコの日」
10月17日(日)
7ページを見てネ！

子供を含めた35人の方々が、赤谷の森の間伐を体験しました。
詳しくは、地域協議会ブログ「ムタコとムタオ」
http://blog.livedoor.jp/mutakosawa/ でどうぞ。

撮影：安田剛士

赤谷の森 写真館

カラフルに彩られる、秋の赤谷の森。色とりどりの木々の下で、
さまざまな命が息づいています。

立ち枯れしたブナ

撮影：茅野恒秀

撮影者コメント

高さも胴回りも、人の何倍もあるブナです。数年前に折れて枯れたにもかかわらず、いまも三国路自然歩道の大般若塚に、道しるべのように立っています。きっとこの樹が若くて元気だった頃には、三国街道をおおぜいの人が行き交っていたのでしょうね。

オコジョ

撮影：出島誠一

撮影者コメント

「チッチッ、チッチッ」と警戒声を出しながら、地面の岩のすきまから何度も顔を出しては中に戻るのを繰り返していました。〝イヤなら出てこなければいいのに…〟。私たちが少し離れると、体まで出してこちらを見ていました。今でもこの場所を歩くたびに、また会えるのではないかと期待してしまいます。

イワナのつがい

撮影：出島誠一

撮影者コメント

イワナのペアが産卵準備をはじめていました。ほかのオスを追いはらいながら、寄り添って泳いでいました。前を泳ぐのがメス、後ろがオスと思われます。

キバラヘリカメムシの幼虫

撮影：竹村秀雄

撮影者コメント

突然、つややかな黄色が目に飛び込んできました。なにかと思ったら、カメムシ！わたしの故郷（長野県）では「ヘッピリムシ」と呼びます。匂いで嫌われますが、さまざまな形や模様のものがいて、じっくり観察するとおもしろいですよ！

ナナフシ

撮影：前田　修

撮影者コメント

秋風が心地よく吹きはじめた赤谷川の河原で、ナナフシにあいました。ナナフシは擬態（別のものに姿を似せること）で身を守りますが、場所の選定を誤ってイタドリの葉の上にいたため、すぐ気づきました。生きものは擬態を誰に教えられるのでしょうか。自然の奥深さを感じます。

田んぼと山

撮影：茅野恒秀

撮影者コメント

赤谷地区では10月中旬に稲刈り、稲干しが行われます。この日は刈り取られた田んぼで、猛禽類(もうきんるい＝イヌワシ、クマタカなど）の調査をしました。すみ切った青空と山々が、秋の実りを祝福しているかのようでした。

赤谷の森でわかったこと

センサーカメラとテンモニ隊の活躍

応用生態技術研究所　所長
足立高行

わたしたちは赤谷の森で、動物やその生息の調査をしています。主な方法は、センサーカメラとテンのふんの調査です。

なぜ、テンのふん？

それも含めて、これまでにわかったことの一端をご紹介しましょう。

●動物を調べる2つの方法
動物の種類調査と暮らしぶりの解明

赤谷の森には、いったいどんな種類のほ乳類がすんでいるのでしょうか？ この問いに答えるのはかんたんではありません。なぜなら、彼らはなかなか姿を見せてくれないから。

そこでわたしたちは、2つの方法をとっています。

1つはセンサーカメラで、どんな動物がすんでいるかを調べます。

もう1つは、テンのふんのモニタリング。テンのふんを調べると食べ物がわかります。そこから彼らの暮らしぶりを解き明かし、テンから見た生息環境を調べています。

●センサーカメラの威力
ふだんは見えない動物を捕える

動物たちにとって、ほかの動物や人間の前に身をさらすことは、死を意味する場合があります。また生活していた証拠を残すことさえも、生死に関わることがあります。そのため動物たちは、活動時間をずらして夜行性になったり、土の中に身を隠したりするのです。

そこで観察する私たちも姿を消し、代わりに動く物があると自動的にシャッターを切るセンサーカメラ（無人カメラ）を設置しました。大源太山頂から赤谷地域の南部すべてをカバーするように、51のセンサーカメラで調査を続けています。

今年、いきもの村にはキツネの巣が…

ホンドテン。彼らのふんから森をひもとく

同じ場所で写る、ニホンザル

●動物たちの動き

17種類の動物登場！　種類によって…

これまでセンサーカメラに写った動物は、おなじみのサルやタヌキをはじめ、めったに見ることのないモモンガやオコジョなど、全部で17種類。

年によって写ったり写らなかったりするアナグマやイタチ、写る場所が増えるイノシシやニホンジカ、同じ場所で写るニホンカモシカ、イノシシ、ニホンザル、ニホンリス、写る場所が変わるタヌキやツキノワグマなど、種類によって異なる、おもしろい現象も確認されています。

●テンモニ隊の活躍

赤谷のミニモニ!?じゃない、テンモニ

もうひとつの調査方法は、テンのふんの調査です。テンは海岸近くから山まで広く生息しているうえ、なんでも食べるのが特徴。日本に暮らすほ乳類の中でも、トップクラスの雑食性、つまり好き嫌いが少ないのです。

この、どこにでもいて、何でも食べるテンのふんを調べることで、テンが暮らす場所の環境がよくわかります。

赤谷プロジェクトには、テンのふんを集めるチームがあります。名づけて、「テンモニ隊」！　その活動の成果が、この5年間に集めた2467個のテンふんのサンプルです。

その分析から、さまざまなことがわかってきました。

●テンふん分析から

食べ物からわかる赤谷の森のようす

分析によると赤谷の森にすむテンは、ほかの地域（九州や関西）に比べてほ乳類を食べることが多く、なかでもネズミ類を食べることが多いようです。逆に鳥類が少ないというのが、赤谷地域の特徴です。（次ページ・表1参照）

植物類では、サルナシが特出しています。そのほかツルウメモドキやオオウラジノキ、ヤマグワ、ヤマブドウなど、数種類の植物で全体の90％以上という、かなり偏った食べ方をしています。

このことから赤谷地域では、谷や林の外側に育つサルナシが、テンにとって重要な食べ物になっていることがわかります。（次ページ・表2参照）

こうした食べ方は一定しているわけで

写る場所が変わる、ツキノワグマ

はありません。その年の雨量や気温の変化などによって環境が変わったり、林道ごとの植生の違い、人の利用の差などが影響しているものと考えられます。

今後は、これらの結果を組み合わせたり、総合化したりしながら、周辺の植生の状況の変化や伐採の影響などを解明していきたいと思っています。

表1　テンの食べものとその頻度（動物類）

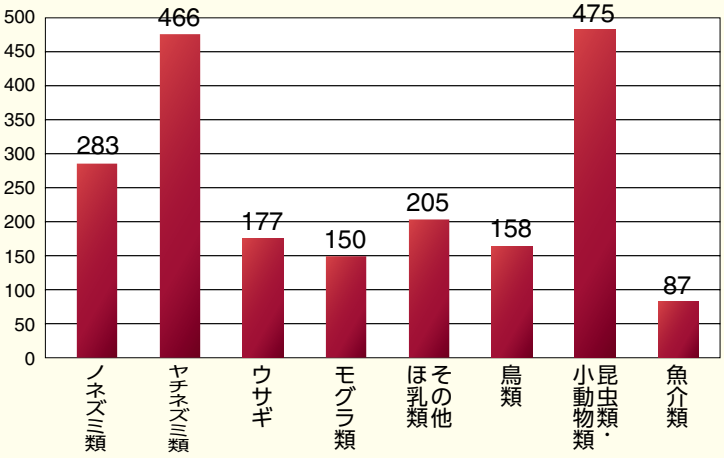
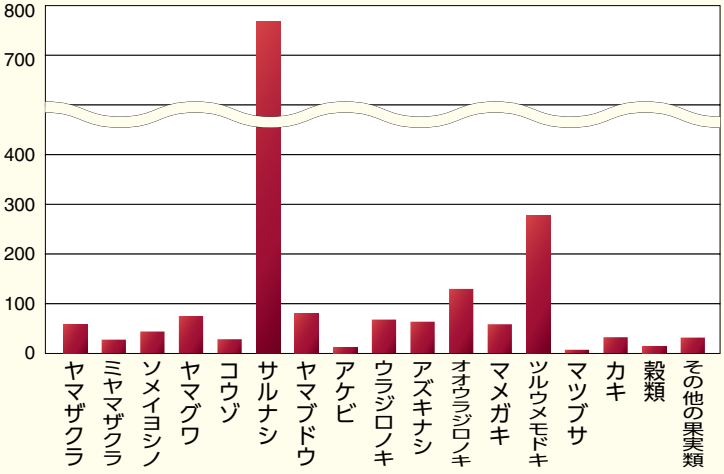


表2　テンの食べものとその頻度（植物類）



●ご協力のお願い

シカが増えそうです。情報を集めています。

これまで赤谷地域では、ニホンカモシカがよくみられ、シカ（ニホンジカ）はまれに見られる程度でした。

しかしこのところセンサーカメラの写真には、ニホンジカがたびたび登場するようになり、赤谷周辺地域の状況が変わったことなどを考え合わせると、今後増えるのではないかと心配されています。

シカの食害は山の植物にとどまらず、畑の作物にも多大な影響をおよぼしかねません。早めに有効な対策を立てるためには、皆さまからのシカ情報が欠かせません。

シカを見たら、その場所と日付を、ぜひ赤谷ふれあいセンター（8ページ参照）までご連絡下さい。

今後も赤谷プロジェクトでは、地元の皆様のご協力をいただきながら、動物と人間との適切なつきあい方を模索していきます。

※写真はすべて、センサーカメラによるものです。

赤谷プロジェクトの 活動

6月～9月 赤谷プロジェクト 活動日誌

活動日	活動内容(活動場所)
6月 6 日	平標山山開き（平標山）
6月11日	利根実業高校環境教育（いきもの村）
6月12日	稲毛中学校環境教育（いきもの村）
6月13日	赤谷プロジェクト地域協議会定例会（旧猿ヶ京小学校）
6月18日	利根実業高校環境教育（いきもの村）
6月21日	新治中学校１年生遠足（小出俣）
6月25日	利根実業高校環境教育（いきもの村）
7月 4 日	赤谷プロジェクト地域協議会定例会（旧猿ヶ京小学校）
7月16日	利根実業高校環境教育（いきもの村）
7月17日	水質濁度調査（ムタコ沢）
7月22日	新治小学校５年生サマースクール（高原千葉村）
7月25日	赤谷プロジェクト地域協議会総会（旧猿ヶ京小学校）
7月27日	ムタコの日実行委員会（法師温泉）
7月30日	利根実業高校環境教育（小出俣）
8月 1 日	リバーポリシーネットワーク視察（茂倉沢）
	赤谷プロジェクト地域協議会定例会（旧猿ヶ京小学校）
8月2~5日	湘南学園夏合宿環境教育（いきもの村ほか）
8月 8 日	ムタコの日（ムタコ沢）
8月21日	三国山清掃登山（三国山）
8月27日	桂川相模川流域協議会視察（茂倉沢）
8月28日	赤谷湖湖上花火大会（赤谷湖）
9月 5 日	赤谷プロジェクト地域協議会定例会（旧猿ヶ京小学校）
9月6~10日	生物多様性保全研修（いきもの村ほか）
9月 9 日	葛城中学校森林環境教育（いきもの村）
9月16日	自然環境モニタリング会議（日本自然保護協会）
9月17~20日	イヌワシ特設調査（赤谷の森全域）
9月28日	新治小学校６年生遠足（三国山）

サポーター募集!!

赤谷プロジェクトの理念に共感し、その目標実現に向けてともに活動するプロジェクト・サポーター（ボランティア）を募っています。

みんな集まれ！ 赤谷の森
森の土の中には秘密がいっぱい

ムタコの日 10月17日(日) 開催！

水源の森を観察してみよう！
緑のダム実験をしよう！
土の中の生きものを探してみよう！

- **日　時**　平成22年10月17日(日)
  荒天中止
  12:00～16:00
- **集合場所**　町営赤沢スキー場
- **参加費**　500円
- **申込先**　090－2249－2119(安田)
- **締　切**　平成22年10月8日

各ワーキンググループ会議

- ●植生管理
  6月14日、20日～21日（現地検討会）
  28日、7月29日、8月30日
- ●猛禽類　7月15日、9月11日
- ●渓流環境復元
  6月7日、8月19日
- ●環境教育　8月11日
- ●ほ乳類　8月21日
- ●地域づくり
  6月13日、7月4日、25日、
  8月18日、9月5日

赤谷の日（いきもの村ほか）

6月5日～6日、7月3日～4日、
7月31日～8月1日、9月4日～5日

猛禽類調査（赤谷の森全域）

6月3日、17日、26日、
7月18日、19日、25日、
8月18日、21日、23日、26日、
9月14日、17日～20日

ホンドテンモニタリング調査
（赤谷の日以外の調査日、赤谷の森全域）

6月13日、26日、7月11日、19日、
21日～26日（連続調査）、8月7日、21日

赤谷プロジェクトに望むこと

藤江達之
独立行政法人森林総合研究所
（元関東森林管理局計画部長）

関東森林管理局で赤谷プロジェクトに関わり、多くのことを学びながら楽しく仕事ができたことを、この場をお借りして感謝申し上げます。

この間、地域の人々、自然保護団体、国の機関による協働という枠組みがどうして可能となったのか、継続しているコツは何か、といった質問をしばしばいただきました。

これは、生物多様性保全などに取り組む方々が、関係者のコンセンサス形成にご苦労されていることの表れではないかと思います。

赤谷には赤谷の経緯があり、人がいて、そのままほかに当てはめることはできません。

ただ、関係者がさまざまな場で話をする機会を設け、共通認識を形成し、それぞれの得意分野で努力をしていくという姿勢の大切さは、共通すると思います。

仲間内だとすぐに通じる内容が、立場が異なると普通に話したのでは伝わらないことはしばしばあります。

そのようなときに、関係者が相互に「どうしてそう考えるのか」「どう説明したらご理解いただけるか」という気持ちを意識すれば、新たなステップが見えてくることがあるでしょう。

この場合、相当の根気と時間が必要ですが、もともと森林を対象とした取り組みは、成果が見えるまでにきわめて長期を要し、功を急いではならないという特質があります。

今後、さらに、森林に対する様々な価値観がじっくりとまじり合い、醸成され、それが森林のあつかいに反映されていくことを期待します。

新メンバーの紹介

8月1日付けの人事異動により、担当者が変わりました。

関東森林管理局
赤谷森林環境保全
ふれあいセンター
自然再生指導官
竹田道夫
（たけだ みちお）

出身は吾妻郡中之条町です。赤谷プロジェクトは、以前、利根沼田森林管理署に勤務していた時に、赤谷ふれあいセンターが発足したことを思い出します。

担当は環境教育、広報関係等です。これから新たな気持ちでプロジェクトに取り組んでいきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

編集部だより

8月の異動により、広報を担当することになりました。

赤谷プロジェクトの取り組みをわかりやすくお知らせしていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

本誌や赤谷プロジェクトに関してのお問い合わせ先等は次のとおりです。

赤谷プロジェクト地域協議会
代表幹事　林　泉
TEL.0278-66-0888
事務局長　安田　剛士
TEL.0278-22-2119
http://blog.livedoor.jp/mutakosawa/

(財)日本自然保護協会
プロジェクト担当　出島　誠一
TEL.03-3553-4107
http://www.nacsj.or.jp/akaya/index.html
メールアドレス akaya@nacsj.or.jp

林野庁関東森林管理局
赤谷森林環境保全ふれあいセンター
所長　鈴木　綾子
TEL.0278-60-1272
http://www.rinya.maff.go.jp/kanto/kanto/akaya_fc/index.html
メールアドレス akaya_postmaster@rinya.maff.go.jp

この情報誌は大豆を利用した植物性インキと間伐材を使用した用紙を使用しています。